

13. 14年間に経験した甲状腺濾胞癌84例の臨床病理学的特徴

山下共行・和田祐和・山崎喜代美・飯原雅季・小原孝男（内分泌外科）
河上牧夫（病院病理科）

14. アルコール性肝障害における肝細胞癌合併の臨床病理学的検討

谷合麻紀子・橋本悦子・野口三四朗・石黒典子・林直諒（消化器内科）

15. 増殖病変における DTA 分化

河上牧夫・古田幸代・桜田実・関根延徳・金室俊子・
長谷川業嗣・伊藤隆雄・野並裕司（病院病理科）

閉会の辞

相羽元彦（第二病院病理科）

1. 抗 MPO 抗体関連血管炎性ニューロパチー

（神経内科） 堀場 恵・近藤裕美・
望月温子・内山真一郎・岩田 誠
（第四内科） 代田さつき・内藤 隆・
湯村和子・二瓶 宏

症例は41歳女性。1995年3月より約1カ月半の経過で発熱，右優位の下肢筋痛，下肢のしびれ・網状斑，右ついで左上肢のしびれ感が順次出現。前医入院時白血球 $15,800/\mu\text{l}$ ，尿潜血2+，尿沈渣（顆粒，赤血球，白血球，上皮），抗好中球細胞質抗体 P-ANCA 677EU。5月6日当院入院。神経学的には四肢遠位部優位の筋力低下。腱反射は両上肢，右下肢で減弱。感覚系は右第1～5指，左第5指，両足底に dysesthesia を認めた。検査所見で C-ANCA 陰性，P-ANCA 177EU，血漿 MPO (myeloperoxidase) $575\mu\text{g/l}$ と上昇。腎生検で糸球体半月体形成，腓腹神経生検で神経上膜の小血管炎と高度の有髄神経線維脱落と軸索変性像，無髄神経線維の減少を認めた。ステロイドと cyclophosphamide の併用により症状は改善した。抗 MPO 抗体関連血管炎による末梢神経障害の報告はまれであった。

2. 小児膜性増殖性糸球体腎炎の組織移行性に関する検討

（腎臓小児科，*腎センター病理検査室）
松永 明・服部元史・
堀田 茂*・川島真由子*・中山英喜*・
川口 洋・山口 裕・伊藤克己

膜性増殖性糸球体腎炎 (MPGN) にみられる組織学的移行性の病態を明らかにする目的で，糸球体内浸潤マクロファージ (M ϕ)，およびメサンジウム細胞の形質変換に注目し検討を行った。

〔対象〕経過中に追跡腎生検が実施された MPGN (focal MPGN を含む)14例で，通常の光顕，IF，電顕に加え抗ヒトマクロファージ (CD68)， α 平滑筋アクチン (α -SMA) モノクローナル抗体を用いた免疫組織染

色を行った。

〔結果〕MPGN の組織学的移行性の主体は糸球体病変にあり，糸球体病変部位に一致して内皮下への α -SMA 陽性メサンジウム細胞の陥入と M ϕ の浸潤が認められた。

〔結語〕MPGN の組織学的移行性，特に糸球体病変形成過程に糸球体内浸潤 M ϕ ならびにメサンジウム細胞形質変換が関与している可能性が示唆された。

3. 卵巣明細胞腺癌の臨床病理学的検討

（産婦人科） 石巻静代・矢島正純・
井口登美子・武田佳彦

〔目的・方法〕卵巣明細胞腺癌は組織学的に papillary type (P 群)，solid type (S 群)，tubular type (T 群) に大別される。1985～1994年までに当科で治療した卵巣明細胞腺癌38例のうち，上記3タイプが各々優位を示す31例を対象とし，パラフィン切片を用いて抗 PCNA 抗体 (mono-ab)，抗 GST- π 抗体 (poly-ab) により免疫組織染色を行った。

〔成績〕①各群に占める I・II期症例の割合は P 群 77.8% (7/9)，S 群 58.3% (7/12)，T 群 50% (5/10) と P 群に多い傾向がみられた。② PCNA の標識率は P 群 21.1%，S 群 12.5%，T 群 14.1% と P 群に高い傾向がみられた。③ GST- π の陽性率は P 群 88.8%，S 群 75%，T 群 40% と P 群は T 群に比し有意に高かった。

〔結論〕同じ明細胞腺癌の中でも組織形態の違いにより腫瘍の増殖能，薬剤耐性における差異が存在することが示唆された。

4. 両側性 MALT 型悪性リンパ腫の1例

（第二病院眼科） 鳥山聖子・
川本 潔・宮永嘉隆

粘膜を介した刺激を受けることによって形成されるリンパ組織を MALT (mucosa associated lymphoid tissue) と呼び，1983年，Issacson らは MALT より発生した悪性リンパ腫を MALT 型リンパ腫と命名した。

このリンパ腫は特徴的な種々の臨床的、病理形態学的所見を有していた。また、腫瘍細胞の異形成が乏しく、反応性病変との鑑別に免疫組織学的検査、遺伝子解析検査が有用であった。今回我々は、32歳の女性で両側の結膜に浸潤した MALT 型悪性リンパ腫の 1 例を経験した。本邦において、結膜 MALT 型リンパ腫の報告は未だ少なく貴重な症例と思われたので報告した。

5. 耳下腺組織の加齢変化について

(耳鼻咽喉科)

森田 恵・

吉原俊雄・石井哲夫

口渇・口腔内乾燥を訴える患者は中高年の女性に多くみられるが、文献的には唾液分泌量の加齢変化は統一された見解が出ていない。今回は、耳下腺について手術時に摘出した正常組織から腺実質残存率を男女別に比較検討を行い、女性により年齢との相関性が高いことを示した。次に、34歳女性・67歳女性・80歳男性の耳下腺組織の連続切片から立体構築像を作成し、腺細胞の萎縮にともなう導管の集合状態や脂肪組織の増大を示した。また、66歳男性・83歳女性の耳下腺組織の電顕所見から腺房細胞の障害やリポスチン顆粒の沈着などの変化を認めたが、腺房の構造が保たれた細胞もあり、残存している細胞の機能が唾液分泌量に関与すると考えた。

6. ゲンタマイシン投与による内耳メラニンへの影響—組織化学並びに電顕的検討—

(耳鼻咽喉科)

吉原俊雄・佐藤美知子・

森田 恵・石井哲夫

アミノ配糖体系抗生物質による耳毒性の研究として今回、ゲンタマイシン (GM) 投与後の血管条と前庭暗細胞領域のメラノゾームについて検討した。

〔方法〕有色モルモット 9 匹に対し GM 100mg/kg/day を 15 日間筋注群 (A 群)、150mg/kg/day を 5 日間筋注群 (B 群)、コントロール群 (C 群) とした。各々の血管条、半規管暗細胞を電顕的に検討しメラノゾーム数を count し、さらに同部の Na, K-ATPase 活性について組織化学的に比較検討した。

〔結果および考察〕血管条中間細胞に存在するメラノゾームは B 群が有意に増加し、暗細胞領域に存在するメラノゾームは A 群次いで B 群が増加、共に有意な増加を示した。basolateral membrane に局在する Na, K-ATPase 活性の変化は認められなかった。内耳に存在するメラニン GM による耳毒性の防禦機能を有することが示唆され、血管条と暗細胞領域での変

化の違いは両者のメラニン合成能や病的状態での反応性の相違があると考えられた。

7. 一酸化窒素合成酵素 (NOS) の 3 種のアイソフォーム遺伝子の組織分布、特に、心筋細胞における内皮型 NOS 遺伝子発現

(第二内科)

関 敏郎・成瀬清子・吉本貴宣・

田中正巳・田辺晶代・塩野谷紀聖子・

新井桂子・成瀬光栄・出村 博

(東京工業大学生命理工学部) 広瀬茂久

高血圧において内皮依存性血管弛緩反応の減弱、一酸化窒素 (NO) 産生障害が示唆されているが、その機序の詳細は不明である。本研究では高血圧ラット (SHR-SP/Izm) の各種組織における 3 種の NOS (nNOS, iNOS, eNOS) 遺伝子発現レベルを WKY/Izm と比較検討した。Northern blot analysis にて nNOS は主に中枢神経系に発現していることから神経伝達物質として作用することが示唆された。eNOS は多様な組織に発現を認め、RNase protection assay にて心臓に著明な発現を認めた。心臓組織の *in situ* hybridization では心筋細胞における eNOS の発現が明らかとなり、心機能調節における eNOS 由来 NO の役割が示唆された。SHR-SP/Izm と WKY/Izm では各組織 nNOS, eNOS mRNA 発現には差を認めず、NO 産生障害に転写以降の障害が示唆された。

8. 凍結保存法および低温保存法における同種血管の抗原性に関する実験的検討

(循環器外科)

古川博史・

華山直二・八田光弘・野々山真樹・

盆子原幸宏・星 浩信・小柳 仁

今回我々はラットを用いた異所性血管移植モデルを用い、凍結保存および低温保存同種血管の抗原性に関して比較検討を行った。

〔方法〕Wister-King ラットの胸部下行大動脈を摘出し、凍結保存および 4°C による低温保存を施した。保存期間はそれぞれ 1 週間とした。保存血管は Lewis ラットの腹部大動脈にブリッジ状に移植し、移植 3 週間後に Wister-King ラットの皮膚をレシピエントラットに移植し、皮膚が拒絶されるまでの期間を観察した。皮膚が拒絶されたことを確認後、移植したグラフトを摘出し、蛍光抗体法による免疫組織染色を行った。

〔結果〕対照が平均 7 日間で皮膚が拒絶されたのに対し、凍結保存群、低温保存群ともに、平均 4 日で皮